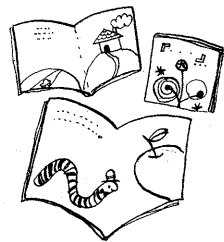


絵本から広がる コミュニケーション

藤津麻里



私たちの家にはテレビがありません。一年前に壊れてから、買わずに過ごしています。それまでは、大きなテレビが、子どもたちが遊ぶ部屋が一番目立つところに陣取っていました。お気に入りの子ども番組や科学番組を、小さな子どもたちがちょこんと並んで見ている後ろ姿は、なかなかかわいいものでした。

でも、見ているうちは楽しそうでも、スイッチを切るときになると騒動が始まりました。誰が消すかでけんかになる、いつ消すかでけんかになる、見終

わると疲れるのか、機嫌が悪くなりゴロゴロ寝転がる…。また、テレビを見ずにはいられなくなるのも困りました。早起きの長男は、早朝に目覚めると、まずテレビをつけて、一人でニュース番組を見るようになりました。あまり見過ぎてはいけないうと思ひ、夫と私は「見ちゃダメ」と怒ったり、コードを抜いておいたりしたこともありました。そんなある日、テレビの画面が映らなくなり、壊れてしまったのです。

テレビのない毎日に慣れてしまうと、いったいこ

の生活のどこにテレビを見る時間があったのか、不思議です。学校や保育所から帰って、ちよつと遊んだらすぐ夕食、入浴、歯磨き、就寝。その合間にまた遊び、本を読み、宿題をやり、と子どもは子どもなりに大忙しなのです。おにごっこやかくれんぼをしたり、たこを作ったりする時間を、一年前まではテレビに削られていたなんて、もったいないことをした気がします。

現在、子どもたちにとって最も身近なメディアは絵本です。単行本と毎月購読している月刊絵本を合わせて、四百冊くらいあるでしょうか。最近、子どもたちが図書館や保育所で絵本を借りるようになり、新たな絵本との出会いが増えました。

毎日読んでいて感じるのは、絵本はただ作品として味わうだけでなく、家族のコミュニケーションを深める道具になっている、ということなのです。

四人の子どもの中で、「読んで！」と絵本を持ってくるのは、四歳の長女だけです。小学二年生の長男と、六歳の次男は、もう自分で読むほうがおもしろいようで、絵本だけでなく図鑑や物語の本も読んでいます。一歳半の三男は、絵本は好きだけれど、持って歩いたり、めくって眺めたりする程度で、まだゆっくり読んでもらうところまではいきません。

長女に頼まれて絵本を読み始めると、それを目ざとく見つけて三男がやってきます。姉が母を独占しているのがおもしろくなくて、長女をたいたたり、絵本を奪ったりして、私のひざに乗りたがります。しまいには「おっばい、おっばい」。仕方なく長女は私のひざから降り、私は三男に授乳しながら読み聞かせを再開。読んでいるうちに、長男や次男が来て、絵本に見入っていたりします。三男のおむつ替えのために私が席を立ち、絵本の続きを次男に読ん

でもらったこともありました。

こうして、毎日何冊も、お気に入りの絵本は何度も読んでもらいうちに、長女は絵本の内容をほとんど覚えてしまつて、ページをめくりながら暗唱してあります。長男は学校の「音読」の宿題で、教科書や自分の好きな本を親の前で声を出して読み、「音読カード」に親の採点とサインをもらうのですが、長女もそれをまねて「おんどくノート」を作り、時どきこの暗唱を私たちに聞かせてくれます。長男の「音読カード」の場合は「正しく読めたか」「はつきりした発音で読めたか」の二項目を、親の判断で丸や三角をつけて採点しますが、長女の「おんどくノート」にはそのほかに、父親と二人で考えたらしい「たのしく」「うれしく」「げんきよく」などの項目が並んでいます。これらについて、私たちが長女に尋ね、彼女自身の判断で丸をつけるのです。「た

のしく読めましたか?」「はい!」「かなしく読めましたか?」「ううん!」というように。

このように、親は子どもに読まされる、長女は読んでもらう、長男と次男は自分で読むなどと、いろいろな形で同じ絵本を楽しむうちに、皆が絵本のせりふや文章を覚え、口に出してみたり、お互いに言い合ったりするようになってきます。

たとえば、今人気がある絵本の一つが、菊池日出夫さんの「のらっこの絵本」シリーズ(福音館書店)です。長野の農村を舞台に、里山や川や野原で生き生きと遊ぶ子どもたちの生活を描いたもので、私たちには耳慣れない長野の方言がいっぱいなのも楽しく、子どもたちは細かく描き込まれた絵を眺めたり、登場人物のおしゃべりをまねたりしています。田んぼの脇を通れば、「あつ、いねかりやってる!」「きょうは、ざっこくくだあ」「ざっこくくだあ」

と次男と長女が声を上げ、長男が「だっこく、だね」と訂正します。「おにこっこしらざあ!」「まてやい」「やだすら」と追いかけてっこして笑い合います。長女が暗記しているせりふをしやべりだすと、次男が次のせりふを続け、長女が間違えると「そこ、ちがうよ!」。しまいには、親子の普段の会話にまで「:ずら」という語尾がつき始めます。絵本のせりふが、私たちの生活の中に溶け込んでいくのです。

きょうだいが多いので、お互いに相手を読んでい
る本が気になる様子で、誰かが読んでいる絵本がお
もしろそうなら、ほかの子もそれを読みたがりま
す。小さな弟が眺めている絵本は、居合わせた兄や
姉が声を出して読んであげたりもします。時には、
同じ絵本を声を合わせて読むこともあります。長男
と次男が『そうべえまっくろけのけ』（田島征彦作
童心社）を二人で私に読み聞かせてくれたり、長男

が音読で『かわ』（加古里子作・画 福音館書店）
を読んでいるとき、次男が絵本の中に描かれている
鳥の鳴き声や工事の音を自分で考えて「かあ、か
あ」「ガーツ、ドンドンドン」と効果音のように言
い始め、鳴き声がわからない鳥は図鑑を持ってきて
調べていたりしたこともありましたが、きょうだいで楽し
む、にぎやかなひと時になりました。

絵本の登場人物は、子育てにも手を貸してくれま
す。何もしたくない、着替えもしたくない子がいる
ときは『ものぐさトミー』（ペーン・デュボア文・
絵 松岡享子訳 岩波書店）や『けんた・うさぎ』
（中川李枝子作 山脇百合子絵 のら書店）、新しい
おかずに手をつけない子は『ジャムつきパンとフラ
ンシス』（ラッセル・ホーバン作 リリアン・ホー
バン絵 松岡享子訳 好学社）が思い出されて、
怒ってかたくなになりそうな私も、少し肩の力を抜

特 集

くことができます。小さい子が食べ物で一人でたくさん取ったときは、『14ひきのさむいふゆ』（いわむらかずお作 童心社）で末っ子の「とつくん」がおまんじゅうをいっぱい取る場面を引き合いに出して、「○○ちゃんは『とつくん』だからしょうがないよ」とほかの子に説明します。子どもには内緒ですけれど、私などは、絵本に出てくる親たちの子どもへの接し方を見て、短気な自分をこっそり反省しているんです。

絵本に登場する料理を皆で作ることもあります。『きょうごのひ』（かとうまふみ作 偕成社）や『ばばあちゃんのなんでもおこのみやき』（さとうわかきこ作 佐々木志乃協力 福音館書店 かがくのとも 二〇〇五年五月号）などを読んで、餃子やお好み焼き、クレープ、蒸しパン、太巻きを作って食べたり、もちつきもやってみました。また、『きょうごのひ？』（瀬田貞二作 林明子絵 福音館書

店）を読んでもらった子どもたちは、その中に出てきた折り紙の重ね箱作りに夢中です。「ママにプレゼント作ってるの。中身はひみつ！」だそうです。絵本を媒介にして、多様な形でコミュニケーションが広がるのが、家族で絵本を読む醍醐味なのではないでしょうか。

テレビを見せていたころは、その間に別の用事を済ませようと、私は子どもたちのそばを離れてしまっていました。絵本は「読まされる」ことで、私の私も否応なく絵本の世界を共有し、絵本を介したコミュニケーションに巻き込まれていきます。

子どもたちがもつと大きくなったら、テレビが再びわが家にやってくる日も来るかもしれません。でも、今はまだもう少し、このままでいるつもりです。子どもに絵本を「読んで！」と言ってもらえる貴重な数年間を、これからも大切に過ごしたいと思っています。（会津大学附属図書館）